松　山　大　学　論　集
第20巻第2号抜刷
２００８年６月発行

『金瓶梅詞話』における「把」・「将」についての考察

孟　　子　　敏

『金瓶梅詞話』における「把」・「将」についての考察

孟　　子　敏

0 はじめに

0.1 『金瓶梅詞話』について

『金瓶梅詞話』は、蘭陵笑笑生の著であり、全10巻で、全100回から構成されており、全字数は80万余である。『金瓶梅詞話』は16世紀末に成立し、中国文学史上、重要な転換点をなす写実小説として非常に有名である。また、写実主義の小説として非常に優れているばかりでなく、当時の口語形式の口頭語の実態にきわめて近いものを伝える「方言調査報告書」とも言えるものである。

『金瓶梅詞話』は、白話小説の伝統的言語形式を打ち破り、一般庶民の日常における言語生活の実態に徹底的に則して書かれている。したがって、言語描写の面から言うならば、『金瓶梅詞話』は、中国小説史上、革命的であると言って全く差し支えないと思う。

この小説は山東方言を基礎として書かれており、16世紀末から17世紀初期にかけての山東南部方言を記録している。その記録によって我々に向かって発信されるものは音声、語彙、文法の各情報に亘っている。1つの例を見てみよう。

（惠蓮）哭了一回，取一條長手巾，拴在臥房裡揝上，悬梁自縊。不想來昭妻一丈青住房正與他相連，說後來聽見他屋里哭了一回，不見動靜，半日只聽喘息之聲，扣房門叫他不應，慌了手腳。教小廝平安兒撬開窓戸，<u>拴</u>進去，見婦人穿着隨身衣服，在門椎上正吊得好。(026/11a/06 ～ 10*)

この例に見られる「拴進去」の意味は何であろうか。「拴」の意味は「つなぐ、縛り付ける」である。「拴進去」はかなり難解であるため、現代の研究者は安易にその「拴」を改めてしまうのである。たとえば、台湾中央研究院近代漢語標記語料庫（2008）では、「拴」は「竄」に直されている。梅節・陳昭・黄霖 (1993) は「拴」を「鑽」に直している。例を見てみよう。

慌了手腳，教小廝平安兒，撬開窗戸，竄進去。見婦人穿著隨身衣服，在門楹下正吊得好。

慌了手腳，教小廝平安兒撬開窗戸鑽進去。見婦人穿着隨身衣服，在門楹下正吊得好。

このような直し方は極めて不謹慎である。「拴進去」は、山東蘭陵方言 (6.3 の付録を参照) によれば、容易に氷解する。実際は、「拴進去」は「翻進去」（「登って入っていく」）というフレーズを表現していて、「拴」は「翻」の当て字である。当該方言において、「拴」は通常 shuān という音で読み、「翻」は普通話の fān に相当する音で読む。なぜ「拴」が用いられ、「翻」を表記するのであろうか。以下にその点を述べてみよう。

中古の「知、庄、章」という三組の声母は、韻母が合口の場合、現代の北京方言では zh、ch、sh という発音に変わったが、蘭陵方言では、pf、pf‘、f というような発音に変わったのである。1 つの例を見てみよう。

	北京方言	蘭陵方言
磚	zhuān	pfān
穿	chuān	pf‘ān
拴	shuān	fān

* 026/11a/06 は、『金瓶梅詞話』第 26 回目、第 11 ページ目の前半、第 6 行目」という意味を表す。前半は a で表示、後半は b で表示する。

これによって、「拴」と「翻」は同じ発音になってしまう。そのため、著録者は聞きながら、「拴」を用いることによって「翻」を記録したのである

本論文では、大安影印本『金瓶梅詞話』を底本として利用する。この影印本は日光山輪王寺慈眼堂蔵本と徳山毛利家棲息堂に基づいており、ごく一部分は北京図書館蔵本に拠っている。日光山輪王寺慈眼堂蔵本・徳山毛利家棲息堂本と北京図書館蔵本という三種は現存する『金瓶梅詞話』系統の版本で完全に揃っているものである。中国の北京図書館本 (現在台湾故宮博物院に収蔵されている) は 1932 年に中国山西省介休県で発現されたもので、現在にいたるまで最も早く発見された『金瓶梅詞話』系統の版本である。

日本の日光山輪王寺慈眼堂本は、1941 年に栃木県日光山輪王寺慈眼堂で発見された。

徳山毛利家棲息堂本は、1962 年に山口県徳山毛利家栖息堂で発見された。

日光山輪王寺慈眼堂本と北京図書館本は同版である。だが、北京図書館本は人為的書き換えの箇所がある。徳山毛利家棲息堂本はこの 2 つと異なる箇所があり、それは、第五回における第九頁 (末頁) のところである。長澤規矩也は、慈眼堂本は棲息堂本より早いテキストである可能性が高いと指摘した (長澤規矩也 1963)。

0.2 句式について

句式とはセンテンスの構文の型である。本稿では、主語と動作を表す動詞との関係によって、センテンスを主動文・施動文・被動文・使動文という 4 種類に分ける。

主動文とは、主語が主動的動作を行なうというものである。たとえば、例 (1)、(2) である。施動文とは、主語が対象に対して動作を施すというものである。たとえば、例 (3)、(4) である。施動文のマークは主に「把」、「将」（『金瓶梅詞話』では、ほかの言い方もある）である。被動文とは、主語が動作を受けるというものである。たとえば、例 (5)、(6) である。被動文のマークは主に“被”

と“吃”（“乞”のような書き方もある）である。使動文とは主語が対象に動作をさせるというものである。使動文のマークは主に“教”（“交”と“叫”という書き方もある）である。この 4 種の句式で漢語におけるすべてのセンテンスパターンを包含できる。例を見てみよう。

主動文：

(1)　我吃。

(2)　我吃香蕉。

施動文：

(3)　我把吃了。(北京口語)

(4)　我把香蕉吃了。

被動文：

(5)　香蕉被吃了。

(6)　香蕉被我吃了。

使動文：

(7)　我叫他吃了。

(8)　香蕉叫我吃了。

(9)　香蕉叫豬吃了。

特に注意すべきは、例 (8)、例 (9) は一般的に被動文であると見られるが、本研究はそのように考えておらず、使動文と見ることである。例 (8) は、私にバナナを食べさせたというニュアンスを表わしている場合が普通である。さらに、例 (9) を見れば、このニュアンスがより明らかとなる。これについて、本稿では馮春田 (2000) の観点を支持する。馮春田は「使役」(本論文の「使動」に相当する) を「具体使役」･「抽象使役」という 2 種に分け、抽象使役はある状況 (条件) もしくは原因が N にある動作や行為施したりあるいはある状態を呈したりさせるが、ときには使役する主語が出現しなく、VP(AP) が N の自主

的動作や行為、状態であるという場合もあることを指摘した。ここでは、「具体使役」·「抽象使役」という表現を「具体使動」·「抽象使動」に変えることとする。例を見てみよう。例 (10)、(11)、(12)、(13) は具体使動文で、例 (14)、(15)、(16)、(17) は抽象使役である。

具体使動

(10) 只見玳安騎馬來接，悄悄附耳低言，說道：“大娘、二娘家去了，花二娘教小的請爹早些過去哩！”(015/09b/10 ～ 01)

(11) 西門慶道：“他教我今日回他聲去。”(016/08a/03)

(12) 婦人道：“他不敢管我的事……只我先嫁由爹娘、後嫁由自巳。自古嫂兒不通問，大伯管不的我暗地裡事。我如今見過不的日子，他顧不的我。他若但放出個屁來，我教那賊花子坐着死、不敢睡着死。大官人你放心，他不敢惹我。”(016/08b/02 ～ 06)

(13) 西門慶和月娘見他面帶憂容、眉頭不展，說道：“李大姐，你把心放開，教申二姐唱個曲兒你聽。”玉樓道：“你說與他，教他唱甚麽曲兒他好唱。”(061/11a/05 ～ 07)

抽象使動

(14) 于是跪在地下，柔聲大哭道：“我的爹爹！你透與奴箇伶俐說話，奴死也甘心。饒奴終夕恁提心吊膽，陪着一千箇小心，還投不着你的機會。只拏鈍刀子鋸處我，教奴怎生吃受。”(012/14a/10 ～ 14b/02)

(15) 于是故意東倒西歪，教兩箇小廝扶歸家去了。(013/06a/05)

(16) 謝希大道：“應二哥，你放哥去罷。休要悞了他的事，教嫂子見怪。”(016/11b/03)

(17) 等到天明，只見大官兒到了，戴着白。教我只顧跌脚，果然哥有孝服。(062/25a/11 ～ 01)

本論文は主に施動文という句式を中心として、その構文および『金瓶梅詞

話』における施動文の使用状況を全面的に掘り起こし、さらに漢語史や現代方言とも結びつけ、その変遷を分析することとする。

0.3 施動文について

施動文は、一般的には処置式と呼ばれる。処置式という概念は、王力 (1944) が最も早く指摘したものである。王力は以下のように述べている。

「中国語には、「把」或いは「将」という助動詞を用いることによって目的語を述語の前に置くという特別な形がある。(中略)「把」というものは、「做」という行為を導入するが、これは「施行」(execution) もしくは「処置」と呼ばれる。中国語では「処置式」と呼ぶ。」これを本論文では、施動文と呼ぶ。

施動文は、主語が対象に対して動作を施すというものである。施動文のマークは主に「把」、「将」である。それぞれ 2 つずつ例文を見てみよう。

(1) 婦人除下來袖了，恐怕到家武大看見生疑。一面亦<u>將</u>袖中巾帕遞與西門慶收了。(004/03a/02 ～ 04)

(2) 不一時，徐先生來到。祭告入殮，<u>將</u>西門慶裝入棺材内，用長命丁釘了，安放停當。(079/24b/02 ～ 03)

(3) 論起春梅又不是我房裡丫頭，你氣不憤，還叫他伏侍大娘就是了。省的你和他合氣，<u>把</u>我扯在裡頭。(011/06a/06 ～ 07)

(4) 我不是那不三不四的邪皮行貨，教你這王八在我手裡弄鬼，我<u>把</u>王八臉打緑了。(022/07a/09 ～ 10)

また、『金瓶梅詞話』では、「擺」という当て字をつかう施動文は 1 つ見える。例を見てみる。

(5) 桂姐罵道：“怪<u>擺</u>刀子，好乾淨嘴兒！擺人的牙花巳才 闔了。爹！你還不打與他兩下子哩。”(032/10a/04 ～ 05)

本論文では、「将」、「把」を中心として、『金瓶梅詞話』における施動文を考察しておこう。

1「将」を使う施動文

1.1「将」の歴史

施動文の中の「将」とは「持、拿」という意味を表わす「将」という動詞が派生したものである。施動を表わす「将」の出現時代について、研究者の意見は一致していないが、一般的に唐代からこの「将」を使い始めたというが認められている。「将」は唐代以後、広く普及していった。例を見てみよう。

(1) 已用當時法，誰將此義陳？（『杜甫寄李十二白』）
(2) 早晩曾將智慧開？（『敦煌変文集』）
(3) 遂將兒半路賣與王將軍。（『敦煌変文集』）

1.2「将」の構文形

施動文では、目的語は不可欠である。これは施動文の鉄則と言えよう。『金瓶梅詞話』において、「将」の基本的構文は「N ＋将 NP ＋ VP」である。「VP」は複雑な形でも可である。例 (9)、(10) では、「将」のあとに相当長い VP を置いている。例を見てみよう。

(4) 吳月娘將他原來的盒子都裝了些蒸酥茶食，打發起身。(052/03a/11 ～ 03b/01)
(5) 那桂卿將銀錢都付與保兒，買了一錢螃蟹，打了一錢銀子猪肉。(012/04b/05 ～ 06)
(6) 楊二郎告道：“……他家還有個女孩兒在我姑夫姚二郎家，養活了三四年。昨日他叔叔殺了人，走的不知下落。我姑夫將此女縣中領出，嫁與

人爲妻小去了。”(088/03b/10 ～ 04a/02)

(7) 西門慶就將手内吃的那一盞木樨金燈茶遞與他吃。(021/09b/07 ～ 08)

(8) 我將他指尖兒輕捏，直說到樓頭北斗柄兒斜。(073/05a/02)

(9) 潘金蓮赶西門慶不在家，與李瓶兒計較，將陳經濟輸的那三錢銀子，又交李瓶兒添出七錢來，叫來興兒買了一隻燒鴨、兩隻雞、一錢銀子下飠、一土覃金華酒、一瓶白酒、一錢銀子裹餡凉糕。(052/16a/11 ～ 16b/03)

(10) 他只受了西門慶那疋雲絨。將三十兩銀子，連那夏提刑的十兩銀子都不受。(070/05a/11 ～ 01)

文脈によっては、N はより前方に置くことができる。すなわち、N の後には VP を挿入してもよい。たとえば、例 (11)、(12)、(13) である。

(11) 這王六兒一面到厨下使了丫頭錦兒，把樂三娘子兒叫了來，將原禮交付與他。(047/07a/05 ～ 06)

(12) 金蓮聽了，恐怕婢子瞧科，便戲發訕，將手中拿的扇子倒過把子來，向他身上打了一下。(048/07a/06 ～ 07)

(13) 西門慶拆看書中之意，於是乘着喜歡，將書拿到捲棚内教溫秀才看。(066/05a/08 ～ 09)

主語がはっきり分かる場合もしくは主語を明言する必要がない場合、N を省略することができる。例を見てみよう。

(14) 毎日將大門緊閉，家下人無事亦不敢往外去，隨分人叫着不許開。(017/06a/08 ～ 09)

(15) 西門慶分付來招，將這一卓酒菜晚夕留着，與二舅賁四在此上宿吃，不消拿回家去了。(079/04a/10 ～ 11)

(16) 先将符藥一把罨在口内，急把酒來大呷半碗，幾口嘔將出來，眼都忍紅了。(053/07b/06 ～ 07)

(17) 月娘分付：把李瓶兒灵床連影抬出去，一把火焚之。将箱籠都搬到上房内堆放，妳子如意兒并迎春收在後邊答應。把綉春與了李嬌兒房内使喚，将李瓶兒那邊房門一把鎖鎖了。(080/06a/09 ～ 06b/01)

1.3「将」の使用環境

『金瓶梅詞話』は、306 箇所で「将」が用いられて施動文を構成している。「将」の使用環境について、以下のような考察を加える。

1.3.1 地の文における「将」

306 回の中、283 回は地の文で使われ、総数の 92%で、絶対的優勢を占める。語り手の叙述言語としての地の文は全篇の約 4 割を占め、会話文は約 6 割を占める。この観点からするならば、地の文における「将」の出現の比率は極めて高いものということとなる。例を見てみよう。

(18) 武松将棒綰在脇下，一步步上那崗來。(001/04b/07 ～ 08)

(19) 這伯爵把汗巾兒掠與西門慶，将瓜仁兩把喃在口裡，都吃了。(067/06a/05 ～ 06)

(20) 月娘連忙的将藥收了，拜謝了兩個姑子。(050/11a/06 ～ 07)

(21) 西門慶将小金鍾只奉了三盃，連卓兒擡下去管待親隨家人吏典。(051/16a/11 ～ 16b/01)

(22) 這楊二風故意拾了塊三尖瓦楔，将頭顱石賛破，血流滿面，趕將經濟來罵道：“…”(093/01b/10 ～ /11)

(23) 劉二将王六兒酒卓一脚登翻，家活都打了。(099/03b/08 ～ 09)

特に注意すべきは、以下のように「将」が用いられる箇所もあることである。

(24) 春梅分付：多有起動，你二人將這四兩銀子拿二兩與長老道堅，教他早晚替他念些經懺，超度他生天。(088/06b/11 ～ 01)

(25) 春梅和月娘匀了臉，換了衣裳，分付小伴當：將食盒打開，將各樣細菓、甜食、餚品、點心、攢盒，擺下兩卓子。(089/12a/08 ～ 09)

(26) 當時統制打死二人，除了地方之害，分付李安：將馬頭大酒店歸還本主，把本錢收筭來家。(099/09b/07 ～ 08)

『金瓶梅詞話』では、ある「分付」が用いられている場合、会話文であるように考えられるのであるが、実際には、地の文において現れている。このように「将」を使う箇所は、地の文と見る。

1.3.2 会話文における「将」

会話文は全篇中約6割を占めるが、会話文で使われる「将」はかなり少数であり、全篇中わずか23箇所のみで使われる。例(27)は独り言であるが、会話文と共通すると見ることができよう。例を見てみよう。

(27) 普天世界，斷生了男子，何故將奴嫁與這樣個貨？(001/11b/04)

(28) 婦人把剛纔陳經濟拿的鞋遞與他看，罵道："賊奴才！你把那個當我的鞋，將這個放在那裡？"秋菊看見，把眼瞪了半日不敢認。(028/07b/02 ～ 04)

(29) 那玳安方說："小的將爹言語對他說了，他笑了。約會晚上些伺候，等爹過去坐坐。叫小的拿了這汗巾兒來。"(077/14b/08 ～ 10)

(30) 月娘走到根前，說："因有你爹在日，將他帶來那張八歩床賠了大姐，在陳家。落後他起身，却把你娘這張床賠了他嫁人去了。"(096/04b/03 ～ 05)

注意すべきは、ある会話の場所で使われる「将」は文語であって、地の文に

属するということである。たとえば、例 (31) では、禅道佛の場所で使われるもので、自然の会話でない。例 (32)、(33) は会話文であるが、やはり「將天比地」や「恩將仇報」は固定的なフレーズとして使われ、「将」は純然たる口語として独立した文法項目に属するとは見られない。

(31) 五戒道：“將那荷根為題。”明悟道：“便將蓮花為題。”(073/13a/09 ～ 10)

(32) 老婆道：“爹沒的說，將天比地，拆殺奴婢。拿甚麼比娘，奴婢男子漢已沒了，早晚爹不嫌醜陋，只看奴婢一眼兒就勾了。”(067/14b/06 ～ 07)

(33) 你來時纔十六七歲，黄毛團兒也一般。也虧在丈人家養活了這幾年，調理的諸般買賣兒都會。今日翅膀毛兒乾了，反恩將仇報，一掃帚掃的光光的。(086/06a/08 ～ 11)

以上のことから見れば、「将」は主に地の文で使われることが分かる。『金瓶梅詞話』の各回における「将」の具体的な分布状況は 3 を参照。

2「把」を使う施動文

2.1「把」の歴史

施動文の「把」は唐代から使い始められたものである。「把」もしくは「将」を使って構成された施動文の意味はいずれも同様である。唐代から南宋までに、この 2 つの形は併用されていたが、「将」が優勢を占めていた。呉福祥の考察によると、敦煌変文では、「将」の施動文は 97 箇所、「把」の施動文は 27 箇所で、「将」が優勢を占める。南宋になってから、口語においては、「将」の活力は弱まってゆき、「把」が施動文の天下を統一してしまったという説もあるが、やはりあらためて検討しなければならない問題である。例を見てみよう。

(1) 莫把杭州刺史欺。(白居易 戯醉客)

(2) 能向老親行孝足，便同終日把經聞。(『敦煌変文集』)

(3) 休把嬌姿與菩薩。(『敦煌変文集』)

(4) 大師把政上座耳拽，上座作忍痛聲。(『祖堂集』)

(5) 你記得，要來京裡，賣頭發把錢與伊。(『劉知遠諸宮調』)

2.2「把」の構文形

2.2.1「把」の基本的構文形

基本的構文は「N ＋把 NP ＋ VP」である。この形は施動文の主流として用いられる。「VP」は複雑な形も可である。たとえば、例 (10) である。特に注意が必要なのは、「把 NP ＋吃 (乞)NP ＋ VP」という形も出てくるということである。たとえば、例 (11)、(12) である。例を見てみよう。

(6) 不防黑影抛出一條欖子來，把來旺兒絆倒了一交。(026/03a/04 ～ 05)

(7) 韓二道："等什麽哥，就是皇帝爺的，我也吃一鍾兒。"纔待搬泥頭，被婦人劈手一推，奪過酒來，提到屋裡去了。把二搗鬼仰八叉推了一交。(038/02b/04 ～ 06)

(8) 那應伯爵故意把嘴谷都着，不做聲。西門慶道："我的兒，不要惱。"(067/20a/02 ～ 03)

(9) 金蓮識字，取過紅帋袋兒，扯出送來的經疏，……拏與衆人瞧："你說賊三等兒九格的强人，你說他偏心不偏心，這上頭只寫着生孩子的。把俺每都是不在數的，都打到贅字號裡去了。(039/12a/04 ～ 08)

(10) 説道："武二哥，你聽我說。只怕說與你，休氣苦。"于是把賣梨兒尋西門慶，後被王婆怎地打，不放進去，又怎的幇扶武大捉姦，西門慶怎的踢中了武大心，疼了幾日，不知怎的死了，從頭至尾，訴説了一遍。(009/07a/03 ～ 06)

(11) 馮媽媽道："尤得大人還問甚麽好也來！把個見見成成做熟了飯的親事

兒，吃人掇了鍋兒去了。”(018/05a/06 ～ 07)

(12) 月娘道：“你不知道，他是那九條尾的狐狸精，**把**好的乞他弄死了，且稀罕我能有多少骨頭肉兒。”(075/26a/01 ～ 03)

文脈によって、N はより前方に置くことができる。すなわち、N の後に VP を挿入してもよい。たとえば、例 (13)、(14)、(15) である。

(13) 房下見我抱怨，沒計奈何，**把**他一根銀挿兒與了老娘，發落去了。(067/19b/09 ～ 10)

(14) 伯爵道：“你看這小淫婦兒，原來只認的他家漢子，倒**把**客人不着在意裡。”(068/06b/02 ～ 04)

(15) 伯爵道：“你每說的只情話，**把**俺每這裡只顧旱着，不說來遞鍾酒，也唱個兒與俺聽。”(068/09a/11 ～ 09b/01)

主語がはっきり分かる場合もしくは主語を明言する必要がない場合、N を省略することができる。たとえば、例 (16)、(17) では、主語はそれぞれ発話者の文嫂、西門慶である。例 (18)、(19)、(20) では、発話者や聞き手にとって、主語を指摘する必要がなく、ある状況が暗黙のうちに了解されている。例を見てみよう。

(16) 文嫂兒道：“這咱哩，那一年吊死人家了（丫）頭，打官司，爲了塲事，**把**舊房兒也賣了。且說驴子哩！”(068/20a/04 ～ 06)

(17) 西門慶罵道：“……休吹到我耳垛内，**把**你這奴才腿卸下來！”(035/08a/07 ～ 09)

(18) 月娘道：“你不來看你娘，他還掛牽着你留了件東西兒與你做一念兒。我替你收着哩。”因令小玉：“你取出來與銀姐兒看。”那小玉走到裡間取出，包袄内包着一套叚子衣服、兩根金頭簪兒、一件金花兒。**把**吳銀

兒哭的淚人也相似。(063/06a/01 ～ 04)

(19) 伯爵道：“也不是，今早李銘對我說，那日把他一家子諕的魂也沒了。”(069/17b/10 ～ 11)

(20) 你乾淨是個毬子心腸－滚上滚下；燈草拐棒兒－原拄不定。把你到明日盖個廟兒，立起個旗杆來，就是個謊神爺，你謊乾淨順屁股喇喇。(026/01b/11 ～ 02)

2.2.2「把」の基本的構文形の変種

①『金瓶梅詞話』では、「N ＋把 NP ＋……」というような「VP」を含まない形が用いられる。この形は基本形の変種と見られる。「N ＋把 NP ＋……」という形は、N が「NP」によって損失や被害を受けるという意味を表わす。文脈や言語環境などによって、どのような損失や被害を受けるかははっきりと表現されるが、第三者としての人物は明確には分からないのである。例文を見てみよう。

(21) 老婆笑聲說西門慶：“冷鋪中捨氷－把你賊受罪不渴的老花子，……就沒本事尋個地方兒？走在這寒氷地獄裡來了，口裡啣着條繩子，凍死了往外拉。”(023/07b/02 ～ 04)

(22) 西門慶大怒，罵道：“我把你這起光棍！……他既是小叔，王氏也是有服之親，莫不不許上門行走？相你這起光棍，你是他什麽人？”(034/07b/02 ～ 04)

(23) 西門慶罵道：“我把你這賊奴才！……你說你在大門首想說要人家錢兒，在外邊壞我的事。”(035/08a/07 ～ 08)

(24) 剛說着，玳安出來，被金蓮罵了幾句：“我把你獻勤的囚根子！……明日你只認起了單揀着有時運的跟。”(035/20a/08 ～ 10)

(25) 西門慶道：“我把你這光棍！……我道饒出你去，都要洗心改過。”(069/16a/11 ～ 01)

②『金瓶梅詞話』では、「N ＋把＋ VP」というような「NP」を含まない形が用いられる。この形も基本形の変種と見られる。「N ＋把＋ VP」という形において、文脈によっては「把」の後の「NP」を省略してしまう。例を見てみよう。

(26) 我也不要他，一心撲在你身上。隨你**把**安挿在那里就是了。(061/06b/09 ～ 10)

(27) 我打聽出來，看我嚷的塵鄧鄧的。不讓我，就擯先了這淫婦也不差什麽兒。又想李瓶兒來頭，教你哄了，險些不**把**打到揣字號去了。(072/18a/03 ～ 05)

2.3「把」の使用環境

『金瓶梅詞話』では、2,052 箇所で「把」が用いられた施動文を構成する。「把」の使用環境については、以下のような考察を加える。

2.3.1 地の文における「把」

すでに触れたように、語り手による叙述言語としての地の文は全篇の約 3 割しか占めないが、「把」が用いられる箇所は 1,358 回であり、総数の約 66％を占め、やはり優勢を示す。例を見てみよう。

(28) 王婆看着西門慶，**把**手在臉上摸一摸。西門慶已知有五分光了。(003/10a/04 ～ 05)

(29) 凡事不拏强拏，不動强動，指着丫頭赶着月娘一口一聲只叫“大娘”，快把小意兒貼戀。幾次，**把**月娘喜歡的沒入腳處。(009/03b/01 ～ 03)

(30) 這老婆聽了此言，便**把**臉紅了。(023/08b/05)

(31) 幾句又**把**西門慶又念翻了。(026/08b/06 ～ 07)

(32) 熬的祝日念孫寡嘴也去了，他兩箇還不動，**把**箇李瓶兒急的要不的。(013/06a/02 ～ 03)

(33) 說時遲，那時快，把刀子去婦人白馥馥心窩内只一剜，剜了個血窟窿。(087/09b/09 ～ 10)

『金瓶梅詞話』には、一見会話文のように見られる箇所が、ニュアンスによってやはり地の文であると見られるものがある。たとえば、すでに触れた「分付」という形は、実際には語り手による叙述言語である。このようなケースは地の文に属する。例を見てみよう。

(34) 分付春梅：把前後角門頂了，不放一箇人進來。(012/08b/05)

(35) 分付小廝：把醃螃蟹才 扉幾個來。今日娘每都不在，往吳妗子家做三日去了。(035/13b/09 ～ 10)

(36) 只見琴童在旁伺候，西門慶分付：抱尺頭抱到客房裡，教你姐夫封去。那琴童應諾，抱尺頭往廂房裡去了。(035/05b/060 ～ 07)

2.3.2 会話文における「把」

会話文で使われる「把」は694箇所であり、総数の約34％を占める。例を見てみよう。

(37) 常言道：“家雞打的團團轉，野雞打的貼天飛。你就把奴打死了，也只在這屋裡，敢往那裡去？”(012/12a/07 ～ 08)

(38) 金蓮道：“恠小肉兒，學不學沒要緊。把臉兒氣的黄黄的，等爹來家說了，把賊王八攆了去就是了。”(022/07a/10 ～ 11)

(39) 玳安道：“我不拿你的，你把剩下的與我些兒買甚麼吃。”(023/11b/09)

(40) 金蓮道：“你把孟三兒的拿來，等我送與他。教春梅送他大娘和李嬌兒的，去回來，你再把一朶花兒與我。”(027/04b/05 ～ 06)

(41) 奴身上不方便，我前番乞你弄重了些，把奴的小肚子疼起來，這兩日纔好些兒。(027/05a/09 ～ 10)

(42) 你說賊三等兒九格的强人，你說他偏心不偏心，這上頭只寫着生孩子

的，把俺每都是不在數的，都打到贅字號裡去了。(039/12a/06 ～ 08)

以上を総合するならば、地の文と会話文との比較に基づく場合、地の文における「把」は優勢を示すということになり、地の文における「将」はより優勢を占めるのである。会話文の場合には、「把」は「将」より絶対的優勢を占める。つまり、『金瓶梅詞話』の会話文では、「把」のみが用いられるといっても差し支えないのであり、会話文における「将」は極く少数であるため、偶然の現象だとも言ってよいぐらいなのである。これに関する詳しい情報は 3 を参照。

全篇の各回における「把」と「将」の分布がどのような状況であるか、以下に考察を行なっておこう。

3「将」と「把」の分布と考察

3.1「将」と「把」の分布

地の文と会話文に分けて、各回における「将」と「把」は統計処理されている。具体的分布は表 1 の通りである。

表 1 「将」・「把」の分布表

項目	将		把		項目	将		把	
回数	地の文	会話文	地の文	会話文	回数	地の文	会話文	地の文	会話文
001	11	1	34	5	051	6		7	17
002	3		7	1	052	7		19	10
003	3		8	2	053	2		23	4
004	4		6	2	054	2		14	7
005	4	1	14	12	055			15	5
006	3		8	3	056			1	7
007	1	1	9	3	057	1		16	2
008	2		12	4	058	2		15	16
009	2		18	1	059	3		34	10
010	4		11		060			4	3
011	1		7	9	061	8		5	9
012	3		30	15	062	1		16	26

013	1		8	3	063			5	1
014	2		7	11	064	2		7	4
015			7	4	065	4		4	1
016			18	12	066	3		0	1
017	3		9	2	067	4	2	16	11
018	5		12	5	068	3		14	7
019	3		25	15	069	1		13	18
020			14	10	070	6		4	1
021	2		16	13	071	6		13	4
022			7	6	072	7		11	17
023	2		19	10	073	5	3	17	7
024			9	6	074	5		15	4
025	1	1	16	12	075	2		15	22
026	4		23	19	076	2		18	18
027	3		22	5	077	3		12	5
028	2		9	6	078			17	7
029	6		13	3	079	7		23	16
030	1		15	2	080	3		9	2
031	3		15	8	081	5		12	2
032			3	9	082	5		14	3
033	2		18	5	083	5		16	6
034	2		16	10	084	2		8	2
035	1		22	20	085			7	5
036	1		5	3	086	3	2	11	22
037	3		10	4	087	2	1	14	4
038	4		26	8	088	2		6	3
039	5		14	8	089	3	1	19	5
040	1		10	6	090	1	1	18	3
041	2		11	1	091	4	1	16	5
042	2		6	7	092	3		39	7
043	2		15	5	093	5		17	6
044	1		10	3	094	3		24	4
045	1		4	5	095	1	1	14	9
046	5		17	7	096		1	11	3
047	7		17	5	097		1	7	7
048	8	1	16	1	098	3	2	15	3
049	6		15	3	099	3	1	17	5
050	1		16	4	100	5	1	12	5
合計	「将」				「把」				
	地の文：283		会話文：23		地の文：1,358		会話文：694		

3.2「将」と「把」の考察

表1に基づけば、以下のように考えられよう。

① 全篇における「将」は306箇所で、「把」は2,052箇所で用いられており、「把」が優勢を占める。

② 地の文では、「将」は283箇所で、「把」は1,358箇所で用いられる。会話文では、「将」は23箇所で、「把」は694箇所で用いられており、「将」は書き言葉として使われているということは明らかであろう。「把」は書き言葉としても、話し言葉としても使われるのである。

③ 全篇の各回では、すべて「把」が使われていて、「将」は10回においてのみ出現している。且つ、ある回では、「将」は1回しか使われない。たとえば、第13、30、40、44、45、50、57、62、69、96、97回である。このことから見れば、当時「将」は普通の言葉として使われていなかったのかもしれない。「把」の方は、日常生活で普通の言葉として使われていたのである。

3.3「将」と「把」の変遷

唐以来、「将」が使われ始め、元代に至るまで、「将」が常用語彙として使われた。しかし、明代になってから、「将」は書き言葉としてのみ引き続き使われるようになったのである。ここで、「将」と「把」の唐代からの変遷を歴史的に考察したいと思う。なお、宋代についての考察は現時点において不完全なので、とりあえず抜かしてある。

考察するに際して、唐代の『敦煌変文集』(呉福祥 1996)、五代の『祖堂集』(張美蘭 2003)、元代の『元刊雑劇三十種』、『關漢卿戯曲集』、明代の『水滸伝』(張美蘭 2003)、『金瓶梅詞話』、明末清初の『醒世姻縁伝』、清代の『聊齋俚曲』および『紅楼夢』(銭学烈 1992、崔希亮 1995)、『児女英雄伝』を用いる。「将」と「把」の分布結果は以下の表2の通りである。

表 2「将」と「把」の分布表

作品名	所属時代	「将」	「把」	備考
『敦煌変文集』	唐	97	27	
『祖堂集』	唐	48	14	
『元刊雑劇三十種』	元	278	350	
『關漢卿戯曲集』	元	142	104	
『水滸伝』	明	281	1,255	詞曲は含まない
『金瓶梅詞話』	明	306	2,052	
『醒世姻縁伝』	明末清初	639	1,631	
『聊齋俚曲』	清	43	533	
『紅楼夢』(庚辰本)	清	665	600	崔希亮による統計
『紅楼夢』	清	886	1,021	銭学烈による統計
『児女英雄伝』	清	42	1,647	

この表に基づいて、以下の図 1 を作成する。

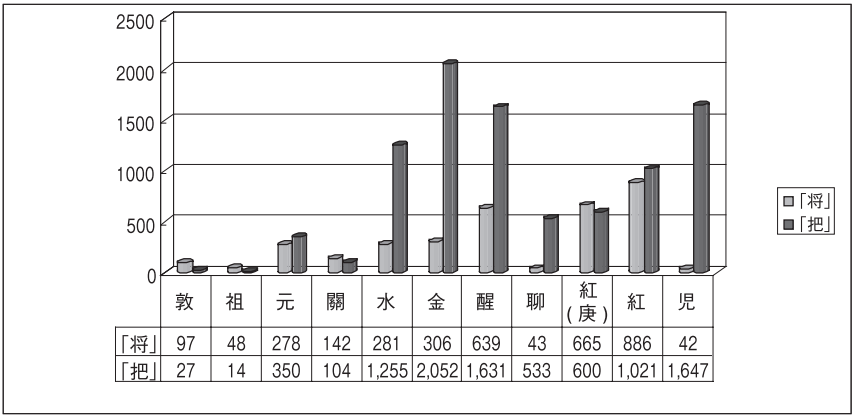

図 1 各作品における「将」・「把」の分布図

表 2 と図 1 から見れば、「将」と「把」の変遷姿勢を把握することができる。

① 唐代では、「将」は優勢を示し、「把」は少数である。

② 元代になると、「将」と「把」は大体同じレベルで使われる。たとえば、『元刊雑劇三十種』では、「将」は 278 箇所で、「把」は 350 箇所で用いられる。

『關漢卿戯曲集』では、「将」は142箇所で、「把」は104箇所で用いられる。

③ 明代になると、「将」は急劇に減少する傾向を示し、その使用環境も書き言葉に限られるようになる。たとえば、『金瓶梅詞話』における「将」である。「把」は急劇に使用頻度が高まった。

④ 清代になると、「将」と「把」の使用状況はかなり複雑な様相を示すが、次のように解釈することができよう。『醒世姻縁伝』と『紅楼夢』では、「将」の使用箇所は多くなってきて、特に『紅楼夢』では「将」と「把」の用例数は大体同じレベルにあり、さらに『紅楼夢』(庚辰本)では、「将」の用例数が「把」を上回るようになるが、『醒世姻縁伝』と『紅楼夢』はかなり規範的文学言語で書かれたものであるのである。『聊齋俚曲』では、「将」の用例は少ないが、その構文は相当単調であり(馮春田 2003)、文語として使われている可能性が大である。『児女英雄伝』では、「将」の用例数は少なく、書き言葉としてのみ使われ、「把」が普通の言葉として使われる。

ちなみに、現代の中原官話や北方官話で、「将」と「把」の使用状況は『金瓶梅詞話』、『聊齋俚曲』、『児女英雄伝』と同様である。蘭陵方言では、「N＋把＋VP」という形も使われている。「N＋把＋VP」において、文脈によっては「把」の後の「NP」を省略してしまう。また、「N＋把＋VP＋它(他)」という形も出現している。「N＋把NP＋VP＋它(他)」の中では、它(他)は前のNPを指している。それぞれ2つずつの例を見てみよう。

「N＋把＋VP」:

(1) 你<u>把</u>吃了。

(2) 你<u>把</u>掛牆上。

「N＋把＋VP＋它(他)」:

(3) 你<u>把</u>酒喝它。

(4) 你<u>把</u>書念完它。

参　考　文　献

呉福祥 1996『敦煌変文語法研究』，岳麓書社，長沙。
崔希亮 1995『把字句的若干句法語義問題』，『世界漢語教学』，第 3 期。
銭学烈 1992『試論『紅楼夢』中的把字句』，『近代漢語研究』，商務印書館，北京。
台湾中央研究院近代漢語標記語料庫　2008　http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/kiwi1/pkiwi.sh
張美蘭 2003「『祖堂集』語法研究」，商務印書館，北京。
長澤規矩也 1963「『金瓶梅詞話』影印の過程」，『大安』、五月号，大安書店、東京。
梅節・陳昭・黄霖 1993『金瓶梅詞話』，梅節 校訂，陳昭・黄霖 注釈，夢梅館，香港。
馮春田　2000　『近代漢語語法研究』，山東教育出版社，済南。